

森村誠一

社奴

長編サラリーマン推理

しゃど

KODANSHA NOVELLS

講談社
ノベルス

NOVELLS



社奴しやど

昭和五九年六月五日第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価六六〇円

著者—森村誠一 ©1984 SEICHI MORIMURA Printed in Japan

発行者—加藤勝久



発行所—株式会社講談社

東京都文京区音羽二—二—二二 郵便番号一—二—二 電話東京(〇三)—九四五—一一一(大代表)
振替東京八—三九三〇

印刷所—凸版印刷株式会社 製本所—大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。

村誠一

ODANSHA 講談社
ノベルス NOVELS

ブックデザイン——市川英夫
カバーイラストレーション——野中昇
本文イラストレーション——野中昇

「社奴」

——
目次

共有した青春	9
認められた社奴	15
七夕の再会	23
世を憚るプロ	35
近づいて来た女神	43
腐蝕を潜るトンネル	49
不正の中の奇遇	64
餓えた検事	73
殺意の方向	83
毀された殺意	96
純粹培養の友情	110
側近の容疑	119

新たな窓	131
分離された現場	136
見つめ合う星	156
不正を食う獣	163
人形の不倫	175
切断された金脈	181
偶像との告別	192
再会した不倫	203
啜え出された罪証	215
復帰した社奴	226
愛の天敵	238
あとがき	242

共有した青春

1

「夏休みも今年が最後だわね」

焚火の炎が魚崎美弥子の横顔を薄赭く染めている。山間の夜は冷えて、小さな火の塊を囲んでいる者の背に冷気が迫ってくる。この地では八月の末は秋の気配である。

「夏休みなんて毎年自動的に回ってくるものとおもっていたけど、もう来年からは夏休みはないんだな」

北杉隆章が感慨深げに美弥子の言葉を承けた。

「夏休みがあったとしても、もうこんな豪勢な夏休みは

もてないだろう」

家田幹朗が溜息まじりに言った。

「おれたちの青春の最後の夏というわけだな」

隅野剛士が沁々と夜空を仰いだ。小さな焚火の光の影響をうけない満天の星空が四人の若者の頭上にあつた。四人はしばらく無言を保って感傷を玩んでいた。櫓火の爆ぜる音が静寂の気を深める。櫓火の炎の奥に過ぎ去ろうとしている四年間を四人四様に反芻しているのである。その四年が楽しく充実しているほどに、社会の四方に向かつて別れなければならぬ訣別の日の接近が重苦しく迫ってくる。

「青春の最後ということはないだろう。おれたちは若い。これまでに仕込んだ燃料でできるだけ遠くまで翔んでいかなければならない」

北杉が感傷を振り落とすように昂然と言った。

「いよいよこれからが人生本番というわけか、仕込んだ種でどんな花が咲くかな」

家田が火に櫓を足した。炎の先に散った火の粉が、束の間闇を鏤める。

「花が咲けばよいが、一生花が咲かないかもしれない」

隅野が心細げに言った。彼は司法試験にチャレンジしている。若さは無限の可能性に満ちていると同時に、かえきれないほどの不安の重みに押しつぶされそうになっている。自分の力は果たしてどれほどのものか。社会で通用するのかしないのか。隅野の不安は四人共通のものであった。彼らは学生生活との別れに際して、実社会の扉の前で希望と不安をないまぜておらずと竹んでいた。

「大丈夫よ。きつと素晴らしい花を咲かせるわよ」

美弥子が束の間しゅんとなった空気を引き立てるように言った。

「美弥ちゃんもう立派な花を咲かせているよ」

北杉が炎に放心させていた目を美弥子に眩しげに転じた。家田も隅野も同様の視線を集めた。

「いやだわ、そんなに見つめては」

美弥子が無意識の中に身体をくねらせた。それが結果的に男たちを惹きつけるしなとなっている。

「美弥ちゃんは卒業すると結婚してしまっただろうなあ」

「そりゃあするだろうよ」

「いったいどんな男が美弥ちゃんの旦那になるのかね」

「そんな男は許せないな」

「同感だ」

「美弥ちゃんは結婚すべきではない」

三人は美弥子に勝手な制約をつけた。彼らは一様に美弥子に対して一途な憧れを抱いている。美弥子は彼らにとって信仰の対象の女神であった。その青春の女神の、地上の男と結婚し、子供を産み家庭を支えるなどという営為は許し難いことである。

「北杉さんも家田さんも隅野さんも急になにをおっしゃるのよ」

美弥子は三人の騎士たちの熱っぽい話題の的にされてたじろいだ。一対三では絶対的劣勢である。

「美弥ちゃん、約束してくれ。絶対に結婚しないと」

三人を代表して北杉が無体な約束を迫った。

「大丈夫よ、私のような者をもらってくれる人なんていないわ」

美弥子は笑ってはぐらかそうとしたが、

「ごまかさないで。この場で言葉でおれたちに約束してもらいたい。絶対に結婚しないと」

北杉を承けて家田が迫った。

「そんなに結婚して欲しくないのなら結婚しないわよ」

美弥子は押し切られた形で言った。

「誓ってくれるかい」

隅野が念を押した。

「誓うわ。私たちの友情に」

そんな約束をする方も迫る側も、本気でそれに固執していない。それでいながらその場の雰囲気は脆い約束に

真剣味を帯びさせた。

美弥子には三人の騎士が自分に寄せてくれる熱い讃仰が痛いほどわかる。彼らと一対一で出会えばどの一人とでも恋が芽生えたといつてよいほどの素晴らしい仲間である。だが一対三の出会いには、その中の一人の選択を難しくさせている。

四年間の大学生活の間、彼らと平等につき合ってきた。女として狡いとおもわなくてもなかつたが、男たちの熱心な関心の的にされているということは決して不愉快ではない。男たちの関心の中央に居心地よく坐りながら、四年間はあつという間に過ぎ去ろうとしている。

美弥子の母親は、彼女の大学進学にあたって、

「男の子とちがつて女の子が大学へ行くということは人生の休暇のようなものよ。女が自由でいられるのは学生時代だけよ。結婚すればすべて旦那様次第ですからね。子供が産まれれば今度は子供に縛りつけられるわよ。いまのうちに精一杯自由を楽しんでおくことね」

と言った。美弥子はそんな母を古いとおもった。結婚は男の所有物となることではない。結婚しても女の自由はあると信じていたが、現実には父や美弥子のために自分の全人生を捧げ尽して悔いがないというより、そこに喜びを見出しているような母の姿を見てみると、自分も結婚すれば母の複製になってしまうのではないかという不安に駆られるのである。

その不安が現実性のない約束に対して本気にさせたのかも知れない。

2

「私たちまた会えるかしら」

美弥子はようやく終ろうとしている、人生の休暇に未練を残すように言った。

「会おうとおもえばいつだって会えるさ」

北杉が力んだ。

「おまえと一対一でデートしようという意味じゃないぞ、こんな旅行ができるかという意味だよ」

家田が言葉をさしはさんだ。

「こんな豪華な旅行ができたらなあ」

隅野の声が詠嘆調になった。費用は限られていたが、時間はふんだんにあった。テントと食糧をかついで行く雲の行方を追うような旅であった。食糧がなくなっても、彼らの旅に共感してくれたり面白かった人たちが、カンパしてくれた。それは一種の「青春の武者修行」であった。

リュックサックは空っぽになっても、彼らの胸は各地で得た想いでぎっしり詰まっていた。

「こういう旅行は無理としても、卒業してもし五年後、十年後に再会するようなことがあったらまた一緒に旅行したいわ」

「是非やろう。いまから約束しておこうよ」

「夏なら休みを取りやすいだろう」

「それを楽しみに社会へ巢立てるよ」

四人の若者は、いま実社会の門口かどぐちに立って臆面おくめんもなくセンチメンタルになっていた。

樞火が爆ぜて火の粉が盛大に舞った。夜が更よけて、夜空のおもしろいおもしろい位置に陣取った星座がいっそう地上に近づいて来たように見えた。

四人の若者は、東京、東都大学の四年生であった。所属する学部はそれぞれ異なっても、学友会活動クラブで一緒になった。彼らが籍をおいたクラブは「民話愛好会」で、大学から正式に認められていなかった。

民話に興味を抱いた四人が集まってつくったもので、一時期部員が十数人になり、正式のクラブとして昇格寸前までいったが長続きせず、また元の四人が残ってしまった。

もっとも彼らにしても「民話愛好会」を育て後輩にリレーして残そうという積極的意志はない。魚崎美弥子を

中心にして集まった観の強い会であるからライバルはできるだけ少ないほうがよい。他のクラブから「魚崎美弥子愛好会」などとかげ口をきかれたのもそのためである。

会の目的は全国の山間僻地へんち離島に埋もれた民間説話を拾い集めることである。それは神話、伝説、昔話なども包含ほうがんしている。時には迷信や禁忌きんぎ、妖怪、信仰、祭祀さいしなども調べた。民話にはその土地の人間の生活史や思想や感情が深く沁しみついている。民話を辿たどると、民族の経た歴史がわかる。

このようにして彼らは休暇の都度つど、日本全国の僻地をめぐった。彼らが発掘した埋もれていた民話も少なくない。

特に美しい美弥子が訪ねて行くと、口の重い年寄りも風化した記憶を掘り起こして語ってくれた。

村や里や島をめぐって集めた民話が、彼らの学業に加えられた青春の記念碑であった。

一時期は終つたのである。

おそらく社会に出ればそれらの優しい民話とはおよそ関わりのない分野で生きていくことになるであろう。それだけに、青春の記念碑が貴重になってくるのである。

実生活においてなんの役にも立たないものが、実人生との苛酷な戦いによって傷ついたときの止血剤になるかもしれない。

だが彼らにはそんな認識はなかった。民話を媒体として集まった四人の若者は、その中軸に美しい女神を据えていた。彼女が彼らの青春の象徴であった。

女神を囲んで三人の男はライバル関係にあったが、不思議に対抗心はなかった。むしろ女神を連帯の要として、友情に結ばれていた。

彼女は性欲の対象としてはあまりにも畏れ多い存在であった。そのためにその愛を争う心の傾きにならなかつたのである。彼女を神体とする同一の宗教の信者として三人は固く結ばれていた。

青春の女神に別れを告げるとき、彼らにとって青春の

It's too early to think of the past.

We are just passer's-by.

We never miss you.

but we never forget you.

過去と称ぶには新しく

願ふには熟女ざりき。

我らは過ぎ行く者なれば

我らは母校を恋すまじ。

なれど母校を忘れまじ。

三村幸子

認められた社奴

1

そして四人の若者が社会の四つの方向に別れてから十年が経過する。

六本木との境界に近い東麻布三丁目の閑静な屋敷町の一角にそのマンションはある。一見して住人のハイレベルなことがわかる超豪華マンションである。半地下式の駐車場の上に五階建の煉瓦色の建物が城砦のように聳え立っている。建物はコの字型になっており、内庭には二十五米のプールと、都心では珍しい樺の大樹を抱え込んでいる。

だがどんなに外観が豪華でもこの建物の非人間性を明瞭に示す設計がある。それは南面にまったく窓が穿たれていないことである。おそらく後から建設されたために、近隣住人を見下すような窓やテラスが規制されたのであろう。それでも全室に入居しているのは、内部が人工的に居心地よく設計されているので、自然の恵みは要らないという住人の意識なのであろう。

家田幹朗は、玄関入口脇にある入居者のコールブザー「五〇一号室」を押した。ドアホーンから金属的な女の声が「どなた」と尋ねた。

「新美の秘書の家田でございます」

家田が鞠躬如として告げると、

「ああいつものお使いさんね」

と女の声が反応して玄関のドアが開いた。入居者以外は、入居者の中から「開ボタン」を押してもらわなければ中へ入れない仕掛けになっている。

ここに住んでいるのは時の大蔵大臣竹村雅臣の隠れた